



KOBE MONOGATARI

# 神戸の物語

緒方しげをNO.18



# ゴンチャロフのフルーツゼリー。



内容もパッケージも新しくなりました。



## フレーティングココ

よく熟れた果実が、そっくりそのまま  
爽やかに贅沢なデザートになりました。  
少し大きめが嬉しいパーティサイズ。  
メロン・オレンジ・グレープフルーツ・  
ストロベリー・グレープの5種類。

KOBE  
**Goncharoff**  
**ゴンチャロフ**

**Juchheim's**

*Tür große und kleine Feinschmecker  
Nabe Frankfurt am Main  
Seit 1822*

# さしあげたいな、夏のときめき。

ユーハイムの ちょっと素敵 なひとときを。



さわやかなリゾートの風、心地よい光のシャワー……。

目ではとらえられないけれど、あの方にさしあげたいのはそんな心がなごみ、ときめくもの…。ユーハイムのサマー・ギフト・コレクションは、涼しさあふれる自然の風と幸せ気分を運ぶおいしさを選びました。

あなたの大切な方に、ちょっと素敵な気分をお届けします。

 ユーハイム

藍のそよ風が  
吹きぬける。

暑さを忘れるひとときを

つくりあげるのは

季節感を大切にした

日本の涼。

中でも藍色の涼しい色彩は

新しい日本の暮らしに

驚くほど新鮮に映ります。

部屋を微風がスーッと

吹きぬけてゆくような心地よさ。

そして、やさしさ。

藍の涼やかな魅力を

夏にこそたつぷりと。

新・夏の暮らし

●6月23日のまで  
●百階ソフィアタワー



DAIMARU KOBE

TEL(078)331-8121



①

涼しげなのれんに浮かぶトンボ。  
まっ赤な夏の夕日を背景に飛んでゆく  
あの懐かしさが甦ります。

●のれん(159×92).....45,000円

■5階カーテン売場

②

陶枕で、ひんやりと。たまには夕暮れ  
近くまでお昼寝ね、というのもいいも  
のですね。

●陶枕.....

①A10,000円  
②B20,000円  
③C20,000円

■5階寝具売場



①

染めつけの器、藍の布、ガラス...  
どれもさわやかさ、ひとさわです。  
夏の味を涼しく見せる素敵な仲間  
と、くつろぎのひとときを。

●藍の布(90×88cm).....40,000円

●古染古伊万里写し

岩鳥8寸皿.....3,300円

●イガ焼染付呉須巻小皿13cm.....9,000円

■5階和食器売場

海に見える白いチャペルでウェディング。

御結婚披露宴・

各種パーティー

好評予約受付中



海を見ながら、神戸ならではのファッションブルなブライダルは、恋人たちの夢。  
白亜のチャペルに続くホールでのご披露宴や、劇場を利用した世界で初めての  
シアターウェディングなど、感動的シーンの演出を心がけています。  
カリヨンの音色に祝福されて、喜びもいよいよクライマックスに――。

ゴルフ ポートピア88  
神戸風月堂 港島

〒650 神戸市中央区港島中町7-2-2 ☎(078)302-5555

本社 / 〒650 神戸市中央区元町通3丁目3番10号 ☎(078)321-5555

ゴルフ ポートピア88  
ポートライナー中埠頭駅前  
(ゴルフ白いチャペル前)



# JUN.

ビデオアート／山口勝弘

これは神戸を愛する人々の雑誌です  
あなたのくらしに楽しい夢をおくる  
神戸を訪れる人にはやさしい道しるべ  
これは神戸っ子の心の手帖です

6月号目次 ● 1987・No.314

表紙／小磯良平

セカンドカバー／中西勝

9 神戸っ子87／磯殿洋子・弘中謙

ある集い／①佳生流②未生流(庵家)

15 コウベスナップ／メリケンパークオープン・ロイヤルブ

リンセス来港

16 美の小箱⑥／槐滋／文・赤根和生

神戸の物語／カメラ・緒方しげを

わたしの意見／緒方学

31 随想／井上・富士田じつ子・藤原康邦

34 連載エッセイ／島京子・カット／早川良雄

36 こうべ味な旅／若杉光夫

38 K O B E 音楽夜話26／「苗ひとすじ」藤香推峰

43 珈琲飲みながら／椎名誠

44 地域文化論／水谷頼介

50 インタビュー／永田耕農先生米寿記念

カンパニー座談会／「国際交流」

57 地域文化論／武田則明

59 経済ポケットジャーナル

《特集「エトランゼとパル」

71 話題のひろば／①映画記念碑パーティー②神戸開港120

年記念式典開催③兵庫オリエン特協会発足④第一回手

づくり洋菓子コンテスト⑤世界女子学生会議開く

86 K O B E ファッションスポット

88 ファッションウオッチング／MONTE OVEST

山西真理

106 もうさんのHYOGO WALK 94／だんじり作り・梶

内照弘さん

117 プロフェッサーPの研究室／岡田淳

118 コーヒーブレイク

122 動物園飼育日記(29)／亀井一成

125 小山乃里子の華麗なる男のインタビュー／山田久志

128 スポーツエッセイ／「ゴルフ」石野順子

130 ルックススポーツ

132 神戸を福祉の町に／橋本明

134 有馬歳時記

136 出会いの旅／「モロッコとの10年目の出会い」板東隼

140 K O B E MODERN CULTURE

142 シネマ試写室／淀川長治

144 神戸百貨会だより

146 K・F・S ニュース

147 びつとん

148 ポケットジャーナル

152 神戸・発見⑥／軒上治

156 連載小説／矢口耕一・カット／谷口和希

180 K O B E ハイカラ文化史④／鈴木正幸・鈴木正幸

182 海船港／メリケンパークオープン

カメラ／米田定蔵・池田年夫・松原卓也



第3回 納涼船上パーティへのお誘い  
ラテン・ミュージック・ナイト  
“サンバデクルージング”

7/26 PM 6:00~  
(日) PM 8:30

『やえしほ丸』  
1800トン

のりば中突提ポートタワー南200M



今年は開港120周年にあたりメリケンパークは神戸海洋博物館や映画記念碑など新名所ができました。  
今回は淡路フェリーの観光チャーター船“やえしほ丸”での絶対楽しい船上パーティ。

大人／男性……………¥10,000  
女性……………¥ 8,000  
中高生……………¥ 5,000

●折詰弁当とフリードリンク(ビール・水割り・ジュース)  
スナック・おつまみは船内にて1品¥200~UPを別途  
有料販売させていただきます。

演奏 安藤義則トリオ (P. 安藤 Pr. 内藤 弘 B. 吹田善仁  
片岡 学 トランペット 江森嘉昭 アルトサックス  
松田年宏 ギター 滝えり子 ボーカル

出演 コバカバーナ専属の  
本場のダンサーとバーカッション  
神戸っ子サンバチーム15名

  
ALBATROSS

神戸 **アルバトロス**  
神戸市中央区中山手通1丁目22-10  
ゾウビル2F  
TEL (078)231-3300・242-1920

●後援/月刊神戸っ子  
コバカバーナ  
サントノーレ  
神戸っ子倶楽部

チケットのお申込み/神戸アルバトロス/神戸市中央区中山手通1-22-10 ゾウビル2F ☎231-3300 滝まで



感性のステージ  
ファッションパーク。

新宿・高野  
BONFUKAYA  
ゲルラン  
ココ山岡  
VICKY  
LEE SOPHY  
ELLE  
アベニュー22  
ブライダルサロン・レーブル  
ダイアナ  
サイズショッパ・ダイアナ  
OFU  
CLAUDE LEMA  
ZAZIE  
三愛

**FASHION PARK**

神戸・三宮さんプラザ センタープラザ3F

営業時間—am11:00—pm8:00  
PHONE—078/3321698

# マジー アストラル



FRANÇOIS DE VILLAC  
PARIS

パリで生まれた星座の香り。

オードトワレ

男性用は黒

女性用は白の衣装をまとって

12星座の香りが

デビューしました。

パリのエスプリが創った、

神秘の香り。

あの方へ

素敵な送り物です。

*la moda nobillita*

## Sanohe

本店 <元町2丁目>

TEL 331-4707

ヌーベルサノヘ <元町1番街>

TEL 321-1710

トアロード店

TEL 331-1952

日本総販売元 有限会社 タック ジャパン 〒550 大阪市西本町1丁目5-3 扶桑ビル ☎(06)536-5057

☆私の意見

# 個性化を進めて 神戸の観光の 増大を図りたい

緒方 学

△神戸市経済局長▽



北野に「風見鶏の館」がオープンして、今年で10年を迎えます。その間、神戸を訪れる観光客も年々増加し、現在では、年間160万人から、170万人もの人々が、北野界隈に足を運んでいると聞いています。

北野界隈が多くの観光客を集めているというのは、北野が持っている個性・特性が観光客に理解されているせいだと思えます。今回、北野界隈と港を結びつけるループバスを、開港120年を記念して走らせました。北と南に回遊性を持たせることにより、観光とショッピングが一体化し、山と海の観光拠点が繋がることを期待しています。今度のメリケンパークの完成は、海に向かっての、その切り口になることでしよう。神戸の街にとって、神戸港が今まで神戸の経済を支え、市民生活を支えてきたのは、数字的に明らかです。しかし、産業港としての神戸港の役割が、今まで非常に大きかったために、市民との交わりが若干欠けていました。そういう所に、メリケンパークが完成し、市民の方々が訪れることによって、親近感が生まれることを信じています。

現代は、あらゆる面が重厚長大から、軽薄短小に変わってきてあります。そういった個性化の時代を迎えて観光が持っている産業的な意味も見逃せません。そういう意味で、神戸の観光を、より飛躍させるために、何か大きな観光拠点を考えて行く必要があります。

いわゆる大規模集客施設・レジャーランドのようなものが、神戸には必要ではないか。それから、もっと海の方に眼を向ける必要があるんじゃないか。この2つの点が、これからの神戸の観光を振興するための、大きなキープイントであると言えるでしょう。

港の産業港としての機能は、六甲アイランド・ポートアイランド等で近代化を進めてもらって、やや老朽化した施設は、市民のいこいの場所として開放してみたいとも考えています。そして、どこにもあるものではなく神戸らしい施設を作り、個性化を進め、アイデンティティを確立して行かなくてはならないと思っています。

'87 VACANCE  
NEW MODE



美容室 **エリザベス**

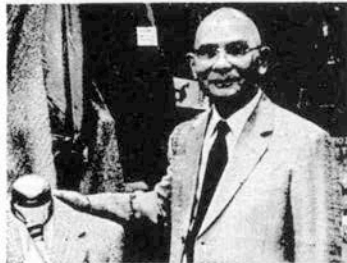
本店 / 神戸市中央区三宮町2丁目6-4(三上ビル)  
TEL (078) 331-8894・4917

お貸衣裳 花嫁衣裳サロン

東京・遠藤波津子直流 関西唯一人者 畑尾美久子の店

一本店と同じ(三上ビル) 神戸市中央区三宮町2丁目6-4  
TEL (078) 331-3258

ハイセンスな紳士服で  
最高のおしゃれを



**三惠洋服店**

神戸・元町4丁目 ☎ (078) 341-7290

# 随想



絵/井上 一

## 祭り

井上 一

△日本画家▽

人間が地球に生存するようになってから人は神を賛美し、毎年日本では春・夏・秋冬に应じて出来た作物、また海の産物を神前に捧げ、神に感謝と祈りを捧げて次の作物豊作と大漁とを祈願する。



自作の絵の前で井上さん

昔より神と人とのつながりは、きつてもきれない関係が生活の中に深く入っている。凶作であれば豊作を祈り、また雨乞いを神に祈ることによって生活が豊かになるようにあるいは病気があれば早く治るように神に願いをする。また子供が生れると健やかに育つようにと神に祈願をする。聖書にも神に十分の一を捧げて神を賛美しなさいとある。踊りを行なって魂を少しずつ、その踊りは土地によって異なり、その衣装も異なる。人間は何かにつけて朝な夕なにその日の感謝を捧げる。朝は日輪を拝し、一日の仕事、健康を祈る自然信仰は昔より

現在にいたるまで行なわれている。長崎おくんち、岩手県のしかおどり、京都の祇園まつりと有名な祭りがあるが、それぞれの行事は魂を少しずつ、人に幸があるようにと祈る踊りであり神社の神事でもある。

祭りが出来るまでその昔には今の現在にはわからない悲しい事柄が多くあったことと  
思う。

そうしたことが、土地と風土によって山車もことなり、だんだんと美しい山車が造られるようになって来た。悲しい事柄を忘れて、前向きに生活をしようとする人間の心のよりどころとなった。神事は神幸式を行い、村を巡って幸せを人々に与える。

人々はみこしをかつき汗して村の祭りをよるこぶ。村人は祭りが来る日を待ちこがれてその日を待つ。小さい頃祭りばやしやしが聞こえる頃になると何か落ちつかず、親にまつりにつれていってもらったのは大人になっても忘れたい思い出となる。

大人になっても、その頃の

事を想うとなつかしく思う。秋祭りは各地で行われるが、村人が一つになって行うさまはほんとに美しい。

人の心も欲をはなれてまつりに奉仕をしている間、目も澄んでいる。洗練されたさまは神にささげている。清い状態である。

赤ちゃんのように、全身によろこびが溢れている。文明社会にあっても、各地に見るまつりをみるにつけ身が清められるような気がする。このまつりがいつまでもなくならないで続けられることをのぞむ一人である。

## ファイルター

富士田じつ子

△「書棚」編集長▽



本に囲まれてくらししています。日に百数十点発行される書籍の中から、毎月数十冊を選んで紹介するのが私の仕事。趣味が読書というのは、つまり無趣味のことだという

話を聞いたことがある。それでも趣味はと問われれば読書と答えてしまう。

ページを開くたびに見知らぬ世界がひらけるのが楽しくて夢中で読みちらかした小学生時代。友人の話す海外の作家名や作品名を知らないというのが恥ずかしいというだけで、内容もわからぬまま翻訳物に挑戦した中学時代。数学や物理より小説を読んでも方がずっと楽、と毎日図書室に通った高校時代……

幸か不幸か活字嫌いになることなく今日に至っている。読みたくなくなれば、途中であっても読むのを中止してしまってもいいという状況に常にあったのがよかったのではないかと思っている。

書棚にズラリと並んだ本の背を見て歩くのが好きだ。視線(?)があった本の前に止まり手をのばす。パラパラッとめくって、相性があわないとすぐ元の位置へ。こういう作業を何度か繰り返し返した後、気があった本だけがわが家になってくる。

しかし、読む段階になると

又別の相性、時というのが存在するようだ。積ん読の本が増えるのも仕方ないと思っている。時が来れば、本の方からおよびがかかるであろうから。

本を選ぶ時、好きな作家の新刊は中味も確かめないで即、買う。新聞、雑誌、マスコミ等で話題になっている本も気になる。「有名人」が選んだ本、という企画がよくあるが、選ばれた本を見ることがよって、その人の意外な一面が見えたりして、こういう記事を読むのは結構好きだ。ただ気をつけたいのは、こういうきっかけで本を選んだ場合、既に新聞の書評というファイルターをひとつはさんでその本と対峙することになっていくということ。先入感というものはやっかいなものではないか拭きたい。

何もない所で出会ってれば全く逆の感想をもつことだってあるに違いない。

しかし、すべての本に一对一で向きあうなんて無理な話。交通整理の役割をしてくれるものが必要です。できる

だけ透明でありながら、ある種のポリシーという網の目をもつフィルター。

そんなフィルターになれたら素敵だなど思っている。

## モノのイベント

よりも、人と人の

## 共感の市場に注目

藤原康邦

△イベントプロデューサー▽

近年博覧会がポルトピア'81以降、続々と開催、そして又、計画されています。基本的な考え方としてはよいのかも知れませんが、このあと一九九〇年前後に全国三十八、九都市が各市周年事業として、それぞれの地方博クラスを打ち出され、どうも私の考えてたイベント未来とは違うようなので書いてみました。

これら計画中、進行中の内容は一種のフレイム(会場の中)で開催され、そこに人々がつどい共感、喜び、感動の提供を行うというもの……これが基本構想です。

ここで日本人にとっての祭りつまりイベントの原点を考えるならば、ハレ……正月、お盆のような年に数回の楽し

み。ケ：日常のことです。みんなハレの日を楽しみにせつせとはたらくわけです。

いまの日本人は、コウベの人々も含めてハレの日が日常になってしまっていて、ハレハレハレの毎日なので、次なるは刺激を求めるようになってきたりします。きわどいもの、スリルのあること。人々にはなく、人とモノ、またモノとモノ、ふれ合いに安堵感を感じてしまい、あぶないあぶない。

僕の突然の結論です。市場です。人と人とのふれ合いがさりげなく、わすれていた、本来あるべきのはずの新鮮な刺激が、新鮮なさかなや野菜とともに息付いています。そして路地角で人々が語り



パウ・プランニング事務所

合い、ふれ合い、自然なパフォーマンスが演じられ、みる人がふえ、それを聞いた隣町の人たちが「おもしろそうだなあ」と足をほこびます。食を提供する人が発生し、ハレのための小道具や、いろんな人たちがひとによって構成され、必要なものがあとに造られてゆきます。

市場はそのような形態で発生してきました。そして神社仏閣が年数回のハレならば、市場とは、ほぼ日常に近いハレの空間になるでしょう。

そのような目で神戸、そして周辺の市場をみてみませんか？たしかに大型店の進出等により、少々さびれた感じの市場はありますが、今言ったような活気のある市場もまだまだ存在します。

世界的にみて、日本とアジアの時代、日本とアジアが手をつなぐ時代と言われる現在の中国、香港、タイ、シンガポール、どこへ行っても市場が元気のところは、住民も元気です。

ぜひ、コウベの市場も注目してはいかがですか？





□ エッセイ

# 食について

— 江維娜さんに聞く(その二) —

島 京子

絵／早川良雄

連休の初日、江維娜(こう・いな)さんが来たので

「どこか、行ってみたいところはありますか」  
水を向けると、植物園があれば行きたい、とのことだった。

須磨の一の谷辺りにある、植物園へは、もう行ったというので、再度山の奥の高山植物園へ行くことにする。

一日寝ていたい、という息子を案内人に決め、しばらく江さんに待ってもらい、いそいそとおにぎりをつくる。ウメボシ、ケズリブシ、ウニを入れ俵型ににぎり、のりを巻く。のりがなくなると、白いままのおにぎりもあった。

案内人は、いつもならばテコでも動かめのだが、江さんのためなら仕方なし、ガソリンコンロ

をバッグにつめている。

天気はよく、萌え出したばかりの新しい緑が、  
ところを浮き立たせる。

植物園は、家族づれで賑わっていたが、思っていたほどの混雑もなく、ちょうどころあいの人出であった。

前日も書いたが、江さんは上海の華東師範大学・社会学科教師で、交換留学生として神戸の女子大の寮に居住している。三十一歳。

広い芝生の一隅の木陰で、私たちは持参のピニールシートをひろげ、腰を下した。

コンロでウーロン茶を沸かし、弁当をひろげた。  
「これ、買ってきたのですか」

江さんが聞く。

「さっき、作ったの、これダシマキっていうんだ

けど、ていねいに焼いたから、食べてみて」

おにぎりのほかは、ダシマキと、これも黄色のタクアンだけで、弁当にしては淋しい。

江さんは、のりを巻かぬ、ウメボシ入りのおにぎりを食べ、ウーロン茶を飲んだ。

「これ、食べて」

私のすすめにもかかわらず、江さんはほかのものには食べない。

聞けば、中国には「弁当」という言葉はない由であった。

「日本の学生、よく弁当持ってきて食べています。中国では、食堂で食べる。ギョーザやシューマイなどの点心（軽食）でも外では食べない」

そういえば、中国の街すじで、麺や肉まんが、湯気を立てながら売られているが、人々は、みなその場で、温かいものを食べている様子であった。これはテレビからの知識だが。

江さんが、日本に来て、一番おどろいたのは、冬でも子供たちがアイスクリームやアイススティックを食べている現実に対してだった。

「中国では、子供に冷たいものを食べさせる親はいません。子供の胃の健康にわるいです。おとなも食べません」

水も飲まぬ。沸かして湯を飲む。

「広州では、最高気温が三十九度にもなるときがあります。みな冷たいものを食べない。朝はおかゆか雑炊に漬物、焼いたパン、大餅（ターピン）など食べます。暑いときに熱いものを食べて、汗を出して涼しくなります」

夏に熱いものを食べて、暑気ばらいをする風習は日本にもあった。

「そうですか、漢民族はか共和国の人々は、温食民族なんですね」

弁当は冷たいものだ。江さんは我慢して、やつとウメボシおにぎりを食べたのだ。

「寮のおかずはどうですか。お口に合いますか」聞くと、江さんはあっさりと言った。

「まあまあです。あまり口に合いません」毎日のことで困るだろう。

「自分で作らせてほしい、と頼んだのですが、みなと同じもの食べるのが規則だ、と断られました」

はじめ、江さんが家が家にみえたとき、酒の肴に、イクラと大根おろし、すし、焼き魚などでもてなそうとしたが、どれも江さんの口にはあわなかったはずだ。冷たいもの、生まのものばかりだった。

「このあいだ北朝鮮共和国の女性が来られて、一しょにごはんを食べたけれど、まったく同じもの食べる。生ま野菜、サシミも、酢のものも——」

「はあ、そうですか」中国料理のすべてを、日本人は食べるが、日本料理の何割ぐらいを中国の人は食べられるのか。

この次、江さんに材料から選んでもらい、中国の家庭料理を作ってもらう約束をした。たのしみである。

新緑が映え、山つつじが色どりをそえる植物園で、江維娜さんは、熱いウーロン茶を何パイもおかわりして飲んだ。



▲筆者紹介

一九二六年神戸生まれ。一九六五年「漏不飲盜泉水」で第54回芥川賞候補。一九六八年「逃げた」で第一回三洋新文化賞を受賞。「TINKO」同人。著書に「夜の訪れ」「母子幻想」「瑣事雑々」等。

# アイ・ラブ・コウベ

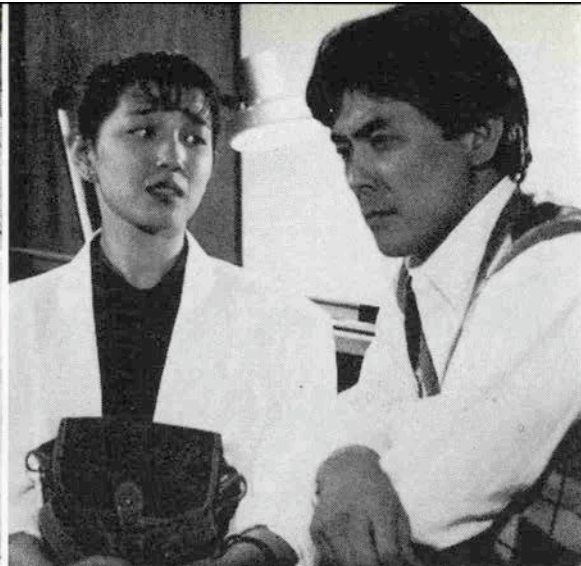
若杉光夫 〈映画監督〉

神戸市と神戸市教育委員会が作られる同和問題についての映画を担当しはじめて、もう十年を越えた。七夕さまのように、年に一度は神戸にゆく。厳密に言うると一作品につき、三度か四度は必ず伺うことになるのだから、これはもう準市民みたいなものだ。大体、うちのかみさん(南風洋子)は神戸育ちだし、実弟(若杉憲一)の神戸住まいも永いから、神戸のことは大体、他人ごとではなかった。しかし、十年の余通いつめたということになると、神戸市の変化を肌で感ずるような所があつて、おまけに仕事の関係上、行くたびに神戸中を走りまわってロケ地を探すものだから、本物の神戸っ子も知らないような所も、意外と知っているのかもしれない。須磨寺で聞かせていただいた一弦琴とか、東出町・稲荷市場の横にあるピリケンさん。運動公園にあるテニス・コート。(これは実に素晴らしい)兵庫の港の昔懐しいたたずまい。書き始めるときりがないが、第一作のロケーションの頃から考えてみると神戸の町は全く凄く変貌ぶりなのである。第二作で紹介した異人館群はいつの間にか若者たちのメッカとなり、名谷に始めて行った時には、地下鉄の駅しかなかつ

た。最近こしらえた『ウエディング・ソングがきこえてくる』で伺った時には又々神戸中が掘りかえられているような気がした。正直言って、まだやるのっていう感じなのである。凄く活気なのである。しかも、どこかしつとりと落着いていて、町の伝統と誇りのようなものを、どこに行っても、誰に会っても感じてしまうのは何故だろう。まるで、外国の町のようなポート・アイランドがあるかと思えば、新開地や灘、垂水、やたら人間臭い巷も残っていて、永住しているわけではないから印象の域を出ないのだが、住むならば神戸と、ぼくもかみさんも弟も思っている。

ほとんど仕事で行っているわけで、朝早くから夜おそくまで(時には深夜に至る)『用意 ハイッ』と号令をかけているだけだから夜の町ことは良く知らない。たいてい疲れ果てて、小さな宿の小さな部屋でドスン、グウなのである。飲むとすれば、スタッフのある部屋が必ずサロンとなつて、談論風発、みるみる焼酎の瓶が空になる。それにしてもコーヒーのうまい町である。どんな店にはいっても、先ず間違いない。東京で余りにもひどいコーヒーに当りすぎるせいでもあろうか、店にはいって漂ってくるコーヒーの香りはたまらない。何も「にしむら」に行かなくてもいいのである。(誤解のないように言っておくが、「にしむら」のコーヒーがまずいと言っているのではない。)

たまにおごつてステーキ・パーティをひらくが、これはトリア・ロードのグリル・青山にきまつている。息子さんが目の前で焼いてくれるのは別に珍しいことでもないが、仕事中心で、食生活



は殆んど無視されるロケーションとあってみれば、こたえられないうまさである。このお店、実はわが劇団民芸の神戸・芦屋の後援会の事務所を引き受けて下さっており、恐らくこまごまとした雑用を多忙の中でこなしておられると思えば、間違っても他のお店には行けないのである。世の中は

左上/映画「ウエディング・ソングがきこえてくる」より吉宮君子、平栗あつみ、辻靖美（左から）  
左下/演技指導する著者（右より二人目）右/主人公・松村直子役の平栗あつみ、恋人・室井謙介役の長谷川初範



▲筆者紹介▼一九三二年大分県別府市生まれ。七高・京大法学部を経て、四七年大映京都撮影所に入社。五一年劇団民芸演出部に入団、現在に至る。主な作品に「唐人お吉」「夜あけ朝あけ」「風立ちぬ」等。その早業には定評がある。その他10年前からは神戸市民生局の同和映画も手掛けている。

勿論だが、映画も舞台も詮じつめれば義理と人情ではないか。などくだをまいてみると、これ又うまいコーヒーが出てくるのだから嬉しい。尚、蛇足ながらこのお店のパンはうまい。鉄板の余熱でこれ又目の前で焼いてくれるから、ゆめゆめライスなど注文しない方がいい。（とぼくは思う）

もっとご馳走しなければならぬお客さまのある時には、東門街の古もんへ行く。このしゃぶしゃぶは絶品だが、このお店のしつらえが又凝っている。値打ちのほどはわからないが、何だか古美術館か民芸館かの中で飯を喰っているような、それでいてちっともせせこましい感じはない。何百年かタイム・スリップしたようなのだやかな気分。日本酒を飲む。まるで神戸ではないのだが、まがうことなき神戸なのである。

兵庫の港のそばでロケをした時、昔懐しい食堂に出会った。ガラスのケースの中にさまざまなおかずがならんでいて、味噌汁あり豚汁あり、御飯に大中小あり、どれもこれもうまそうに思わず幾皿もテーブルにならべて歓声を上げる単調な外食生活の中でこんな嬉しいことはない。とても食べきれなくて少しずつ残すのだが、それでもいささか食べすぎてしまう。午後の撮影は今食ってきた屋飯の話でもちきり。そういうお店が軒もあって、土地の人に聞いて、もっとうまい店、もっと安い店と毎日毎日食べ歩いて倅せなことであった。

ともあれ、神戸の思い出もたまりにたまった。そして又来年も訪ねるわけだが、今度も又、市役所前のラーメンやさんでうまいワンタンメンを食うことになるだろう。楽しみなことである。

# 笛ひとすじ

藤舎 推峰 〔横笛奏者〕



私と神戸との深い付き合いのきっかけとなったのは、今から十五年ほど前のことです。

演出家でもいらっしゃる岡田美代さんの紹介でモダンバレエの今岡頌子さんと、一度即興舞奏をしてみませんか、岡田さんより云われ、私は今まで、古典の世界とジャズの世界でしか吹いたことのない人間でして、バレエと即興して、果たしてうまく行くかな……と思いい、とまどっていました。でも「新しい出会い」ですので、引き受けることにしました。

たしか、タイトルは「レモンの月」だったと思います。場所は神戸国際会館です。岡田さんより今岡さんを紹介されました時の印象は、とても細い、スタイルの良い美人でした。

さて、幕が開き、初めは私のソロがあり、その後今岡さんが登場して、私と今岡さんの付きっ離れずといったようなねらい合いがあり、最後二人は、すごく激しい音と舞の世界となり、私は興奮のあまり、ステージで一回転トンプをきり、幕となりました。終わって、岡田さんが楽屋へ飛んできて、

「推峰さんすごかったわね……」

といい、私は良いか悪いかといったことは、まったく自分自身わかりませんでした。これが神戸

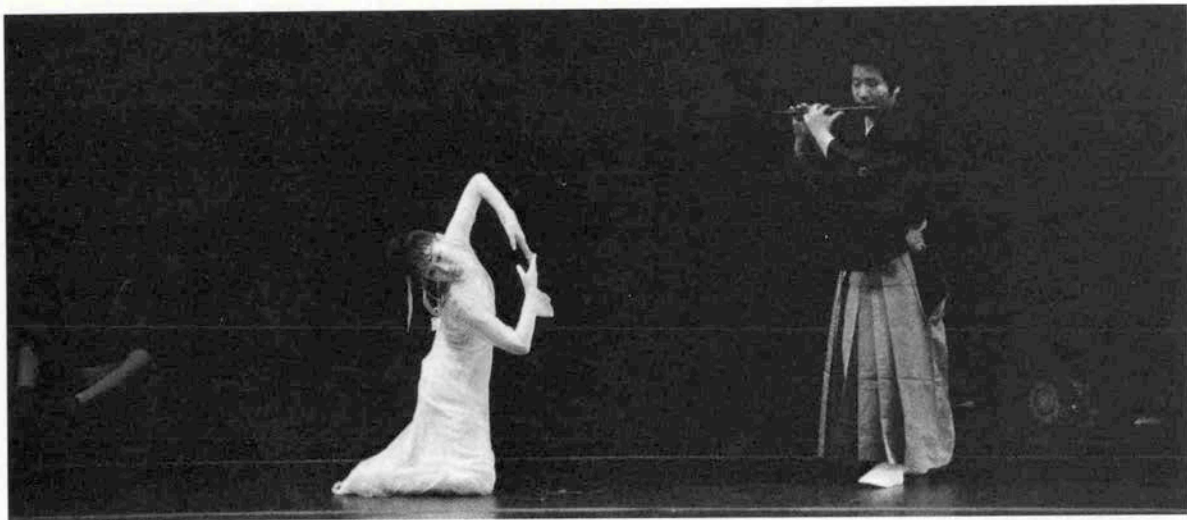
との出会いです。

それから京都の花背の里へ、惟喬親王と、在平の故事から「雪中に咲く杜若」の因縁の不思議さを作品にと、岡田、今岡さんと、紫の雪のドレスを創った藤本ハルミさんらと出掛けたときのことです。

残雪に咲く杜若は美しく愛らしいのですが、その根の力強い凄さに打たれ、人間も表だけで咲くのではなく、心の中に反対のものがあってこそ咲くのだなど、芸術のルーツを見た想いがしました。そして美しい曲想に根づく重さを表現したいと

「雪の杜若」を作曲したのです。

その後、女性書道家の望月美佐さんと、神戸とソビエト（リガ市）との姉妹都市でソビエトへ行き、二人の芸のフュージョンが始まりました。書がかかる早い一瞬の間にどのように吹くか、まるで剣道をしている反射力のようにでした。望月さんも、笛が鳴っていない空間に流れる早さで書かれる字のすばらしさ、今でも時々試合をいたします。芸というものはほんとうにむづかしく、最近つくづく思い悩みます。我々二人だけが感動しても見ているがわ、聴いているがわの気持ちがあなかつかめません。又、芸をやっている側からは「芸の術」、いわゆる見、聴きしている側に麻酔を



「翅」昭和54年11月1日東京草月ホールにて/今岡環子<左>と藤倉推峰

かけなければなりません。麻酔のかからない芸は芸術とは言いきれません。私はこのことで、常に私の吹く笛の世界へ導くことを頭におき、吹いております。

最近、デザイナーのコシノ・ジュンコさんと何となく会い、芸論をしました。彼女いわく、「推峰さんの世界も大へんだけれど、私なんか今作ったものは、明日になればもう古くなっているのよ。その点、推峰さんが同じ曲を二日続けて吹いても、一日目と二日目が全然ちがった曲に聞こえるでしょう。だから、推峰さんはいいわねえ。」といました。たしかにデザイナーの世界は一分一秒で変わります。そして、形として残ります。ある意味で、残るよさ、私のように瞬間に消えるよさ、どちらがよいかは長短あると思っています。二人は夜おそくまで話しつづけ、いつの間にか、いねむりをしていました。

話しは神戸に帰りますが、食べ物、洋服、そして、芸術家のたくさんいらっしゃる町です。とてもオシャレな町で、常に燃えている調和のとれたすばらしい町です。私は大好きです。私も一度神戸でリサイクルでも開きたいと思っています。その節には神戸の皆さん、よろしく願っています。



藤倉推峰（とうしゃすいほう）

横笛奏者。本名は中川勲。昭和16年東京生まれ。父は藤倉流笛家元、藤倉秀蓬。4歳の時、京都に移り、6歳頃より笛の手ほどきを父より受ける。

今年3月、音楽之友社より著書「笛ひとすじ」を出版。内海俊照・武原はん・日野皓正・福原百之助といった異色の顔合せによる対談など、興味深い。